

シモジイ



山蔭ヒラク

シモジイ

パイヤが香る国から 5

パートライフ・ラブソデイ 19

諸悪の根源 51

宇宙の向こう側 119

駆け込み寺 159

河川敷、そして満月 197

あとがき
215

パイパイが香る国から

【ユオン】

姉のニユンはユオンが日本へ留学することには諸手を上げて賛成という感じではなかったが、強く反対もしなかった。

ホーチミン市郊外、この田園の地で、自分たち夫婦と隣り合って暮らしてくれれば何かと重宝で心強いし、自分ともう一人の姉アイが、数年前に相次いで他界した両親に代わってユオンの親代わりを続けられる。それに、何と言ってもこの国では家族も親戚も集まって暮らすのが当たり前なのだから。好きな男ができて結婚するまでは、自分たちのそばに居て欲しい。それが二人の姉、ニユンとアイのユオンに

対する気持ちだった。

「私、日本語の先生になりたい。だから日本に行くお金出して欲しい」

黒目がちの大きな目に、言い出したら後へは引かない意志の強さに、すぎる表情を交えながらユオンは姉たちに訴えた。

ベトナム人の勤勉さや能力の高さを買って、多くの日本の企業が進出している。それらの企業にとって日本語のできるベトナム人は大きな魅力となっている。

「これからは日本語ができると確かにいいけど」

長女のアイがつぶやくと、ニウンも頷く。

「でも、ユオンはまだまだ子どもだから」

「そうねえ、やっぱり側に居てくれる方が安心なんだけどね」

二人の姉は困ったなあという表情で、二十歳になったばかりのユオンを見つめる。

「私もお姉さんたちと離れるのは淋しい。でもね、どうしても日本語の先生になりたい」

姉たちは、両親が経営していた食堂兼雑貨店を受け継ぎ、仕事と家事の両方をこ

なしている。夫は二人とも公務員で仲が良く、仕事の後は連れ立って遊びに行くことが多く、子育てや家事は妻任せというベトナムの男に多いタイプだ。家事に仕事に子育てに忙しい姉たちの姿を見て、ユオンは何か専門的な技能を身に付けて、自分のやりたいことが存分にできる生活を手に入れたいというのが近頃はつきりしてきた望みだった。

「ユオンの将来のためには日本に行くのは良いかもしれない」

アイが彼女を思慮深く見せている切れ長の一重瞼を伏せながらつぶやくように言
うと、ニユンも頷く。目を上げて二人の妹の顔を交互に見ながらアイが言葉が続け
る。

「お父さんとお母さんが残してくれたお金が残っているし、お店をやりながら私と
ニユンで貯めたお金があるから、ユオンが日本へ行つて勉強するお金は出せるわ」

両親も姉たちも決して楽に稼いだ金ではないことをユオンは知っていた。その金
を自分のために使つていいと言つてくれる姉たちに対する感謝の気持ちと、家族の
繋がりに守られて生きている幸せを彼女は感じた。

「でも、日本での生活費はアルバイトをして稼ぐのよ」

当たり前前のことは言わないで、とばかりにユオンはニユンに笑いかける。

「アイ姉さん、ニユン姉さん、ありがとう」

ホーチミン市の繁華街にあるレストランで週に三日、ウェイトレスをしているユオンは、日本へ行ってもアルバイトで生活費を稼ぐ自信があった。

レストランには都会で働くベトナム人の男女に混じり、日本人のビジネスマンもよくやって来た。それらの日本人たちは皆、礼儀正しく、温厚だった。ユオンにとって意外だったのは、ベトナム語が片言でも話せる日本人客は皆無で、日本語を話せるベトナム人を同伴するか、あるいは英語で用を足そうとする人たちばかりであることだ。

「ホーチミン市で働く日本人は、どうしてもこの国の言葉を覚えようとしなないんだろ
う」

ユオンの素朴な疑問であり、同時に日本語を身に付けることが自分の将来にとってプラスになると考えた根拠の一つだった。

兄チュアンのことが大好きなユオンは、まだ子供だった頃、よく兄のベッドに潜り込んで眠った。一日中戸外を走り回って遊び疲れたチュアンは、ベッドに横になるとすぐに深い眠りに落ちたので、妹が横に寝ているのを朝まで気がつかず、目を覚ました瞬間に飛び込んでくる妹の間近な寝顔に驚かされたものだった。さすがに兄妹が思春期を迎えた頃から、ユオンはこの行動を控えるようになったが、それでも皆無とはいかなかった。チュアンのことを一人の男というよりは、そばに居てあたりまえの空気のような存在と感じ、子供時代の延長で兄妹が同じ部屋で寝起きしていることにも何ら抵抗感のなかったユオンは、昼間辛いことがあった時など、安心感を求めて眠っている兄の横にこっそりと身を横たえることがたまにあった。

日本への留学が決まったこの夜、ユオンは久しぶりに兄のベッドに潜り込んで眠った。

開け放した窓からは家の周りに広がる畑の上を通ってきた微風が入り込み、彼女が潜り込んでいることも知らずに寝息を立てている兄の存在がもたらす幸福感と相

俟って、ユオンの眠りを一層甘美なものにしてくれる。

ベトナムの格闘技ボビナムに打ち込んでいるチュアンは、筋骨逞しい自分が寝返りを打つと、小柄で華奢な妹を押し潰してしまいそうで、ユオンの存在に気づいて目を覚ますと、妹を起こさないようにそっと寢床を抜け出し、部屋の反対側にあるユオンのベッドに移動するのが常だった。

目覚めの前のまどろみの中、ニユン姉さんが作ってくれる朝食のフォアを「チュアン兄さんと食べよう」と心の中でつぶやいて軽く微笑む。

「チュアン兄さん、私が日本へ行ったら淋しい？」

平たい米粉麺を湯がき、温かい鶏の出汁をかけ、鶏肉とモヤシ、様々なハーブをトッピングするニユン特製のフォアで朝食を楽しみながら、向かいに座ってやはりフォアに舌鼓を打っている兄に、ユオンは悪戯っぽい目で問いかける。

「ユオンに侵入されずにゆっくり眠れるから、大歓迎だよ」

匙にすくったスープをぶっ掛ける仕種をし、ユオンは兄を睨む。

【ユオン】

「もうっ、チュアン兄さんは意地悪なんだから」

いつもお互いの存在を感じながら暮らしている姉たちと兄は、ユオンにとって空気のようなものだ。

ゆっくりとユオンに目覚めが訪れる。横に寝ているはずの兄チュアンの姿を見ようと、ユオンは目を開く。兄の姿はない。

「ああ、やっぱりチュアン兄さんは、私のベッドに避難したんだわ」

ユオンは自分のベッドの方に視線を向ける。

そこに寝ているのは兄ではなく、同じ年のフェイ。自分たちが居るのは、留学生向け日本語学校が斡旋した2DKのマンション。この部屋にはユオンとフェイ、もう一つの部屋にはやはりベトナムから来た二人の女性が寝起きしている。

ここは故郷ベトナムではなく、大阪なのだ。

【ダイ】

ベトナムの首都、ハノイ。近代化の著しいホーチミン市に比べると、いくぶんアジアらしい混沌とした風情が漂う。街のアジア的な雰囲気醸しているのが、例えば自転車や天秤に売り物を満載して商売を繰り広げる行商人の多さである。しかも、そのほとんどは女たちだ。

ベトナムの代表的な麺料理の食材一式を、スープとそれを温める火種、さらには客を座らせるための風呂用の椅子などと一緒に天秤に驚く程コンパクトに積んで商いするフォー売り。色鮮やかな切り花を自転車に積んだ花売り。ダイの母親も、ハ

ノイの風物詩とも呼ばれるベテランの行商女の一人であった。

兄、弟と一緒に、自転車に野菜を積んで売り歩く母親に、幼いダイは付いて回った。母親の自転車はもはや乗り物と言うよりは移動店舗で、前カゴ部分、サドル、荷台などに野菜が積み上げられ、さらに野菜を詰め込んだ十個程の丈夫なビニール袋がハンドルは勿論、車体フレーム全体に渡って吊り下げられている。

母親の自転車と付かず離れずの所でボールを蹴って遊ぶ兄と弟を尻目に、ダイは母親のそばにいて、その商売の仕種を見ているのが好きだった。いつもダイが惚れ惚れとして見飽きなかったのは、客の注文を受けて野菜を取り出し、ホコリや無駄皮をサツと払って新聞紙に包んで渡しつつ、暗算で弾いた値段を告げ、肩から襷掛けにした小さな鞆に札を入れつつ釣銭を取り出すという、母親の一連の手さばきの見事さだった。

ダイの父親は友人の経営する電気店で働いていたが、ベトナムの男たちには珍しくないのんびり屋で、昼間からカフェに居座って友人たちと世間話にふけったり、夕方前から焼酎を飲んで足をふらつかせていることも多かった。

ダイは兄弟で最も背が低く、自身の体を貧弱に思うというコンプレックスを抱えていた。そのことで高校を卒業する前からベトナムでも人気のあるフットサルに興じる兄、弟とは心理的に疎遠になっていった。母親譲りの恰幅の良さを誇る兄弟たちが外で遊んでいる間、ダイは父親が勤め先から安く払い下げてもらったパソコンをいじるのを楽しみとしていた。

「コンピュータソフトを開発して金儲けをする」

ダイは兄弟にも両親にも、ことあるごとにそう口にするようになった。そして、心の中に「日本でコンピュータの勉強がしたい」という夢を膨らませていた。

しかし、多くのベトナム青年にとって、日本での生活費はアルバイトで稼ぐにしても、渡航費や日本語学校の学費を工面できるのはある程度裕福な家庭に限られた。母親が今も続ける野菜の行商と父親の僅かな給料だけでは、家族の生活を支えるのがやっとだった。

ダイの兄は、企業や農家を相手にバイクで荷物を運ぶ仕事をしている。日本で言うバイク便だが、運ぶ荷物はもっと多彩である。日本の場合は書類、CDなどのデ

デジタルメディア、機械の部品といった小物がほとんどだが、ベトナムではコピー機などの機械まるごとであったり、生きた豚を檻ごと荷台に積んで搬送という注文もある。

「ダイ、今日いい話を聞いたよ」

家族で夕食を囲んでいる時、兄が仕事先から持ち帰った話がダイの人生を変えた。「日本の会社に荷物を届けたんだ。そこで働いているベトナム人に聞いたんだが、その会社ではコンピューターに詳しいベトナム人を探しているらしい。一度会いに行ってみないか」

ダイに断る理由はなかった。

NAIGAI・SEIKIと看板の上があった工場を訪れると、通訳のベトナム女性がダイを事務所に案内した。現れた作業服姿の日本人は、田中と名乗る三十代半ばの駐在員だった。

内外精機は、プラスチックを加工成形するための金型を作っている中小企業で、

本社は大阪にある。三年前にハノイ近郊に進出し、十数名のベトナム人技術者と単純作業を行う工員で操業している。駐在員は田中だけで、彼が製品作りの管理、指導から人事等のマネージメントまで一切をこなしている。

通訳を介して会社のあらましを説明した後、田中は本題に入った。

「日本で語学と技術を学んで、それからこちらで働いてくれるベトナムの若者を探している。どうだろう、やってみるかね。もちろん適性を見るためのテストはさせようが」

以前は熟練の職人が手作業で削り出していた金型は、今ではコンピューター制御の工作機械で作ることができるようになった。金型製造をベトナムで行う内外精機にとって、工作機械に金型を切り出すデータを入力でき、しかも日本語で専門的なやりとりができるエンジニアが是非とも必要なのだ。

アジアの先進国、日本に行きたいと望んでいたダイにとって、まさに願ってもない話だった。

適性テストはその場ですぐに行われた。テストといっても、パソコンの基本的な

扱いができるかどうかのチェックと、後は社会人としての常識の有る無しを確認するための世間話だった。

渡航費用、日本の語学学校の学費を会社が出し、本社の工場で働きながら日本語を学ぶという条件でダイの留学が決まった。

パートライフ・ラプソディ

【早朝ブルーカラー】

「今日はやけに多いな」

机の前の金属製のゴミ箱を持ち上げ、中身を透明のゴミ袋に空けながら男がつぶやく。二十個ほどのゴミ箱を空にしたが、まだ半分も済ませてはいない。人間一人を包み込めるほど大きな業務用ゴミ袋は、すでに半分方詰まっており、それを引きずりながらの移動は男の腰に時々痛みを走らせる。

「今日のコーヒーはドトールやな」

朝六時から始めて九時に終える清掃パート。帰りがけに疲れをほぐす一杯のコー

ヒーが男は待ち遠しい。ゴミ集めが済めば、次は掃除機掛けだ。この広告代理店の後、旅行会社と商社の事務所が待っている。

下田和夫、六十五歳。パート仲間のオバちゃんたちが男をシモジイと呼ぶようになったのは、彼がこのビルの清掃の仕事にありついて間もなくだった。後二ヶ月も経って年が変われば、シモジイがこの職場に入って丸二年になる。

清掃を終えて、カートに積んだゴミ袋の山をシモジイが運ぶ先は、地下一階の分別処理所、通称ゴミ庫だ。

「ヘーイ、シモジイ。チンジャオー！」

ゴミ庫の床に座ってゴミの選り分けをやっているベトナム人のビンが、彼の国の言葉で「おはよう」と声を掛ける。長身でなかなかハンサムな十九歳の青年だ。

「チンジャオ、ビン、今朝はビンビンかい？」

「当たり前だ。僕ら若いから、毎朝ビンビン。シモジイはへロへロ」

「馬鹿野郎。オレだってビンビンさ。時々はな」

「ははは、トキドキね」

ビンの横でゴミ袋と格闘しているホアンもニヤツとしながらシモジイを見て「トキドキ、ビンビン！」と言う。彼らベトナムの青年たちは毎朝ここでアルバイトをし、午後から日本語学校に通っている。

「チンジャオ、何話してる？」

ゴミ袋でいっぱいのカートを引きながらゴミ庫にユオンが入ってきた。幼さの残る顔立ちだが、ビンよりも一つ年上だ。

「ユオンのこと可愛いね、と話していた」

それはまんざらお世辞ではない。一見華奢に見えるがユオンが女として成熟した体をしていることはブルーのユニフォーム越しにも伺われ、シモジイはときめくものを感じていた。ゴミ溜めにバラの花とはまさにこのことだなと、彼はいつも思う。

「ははは、ありがと。シモジイも可愛いよ」

「へへえ！ ユオンからそう言ってもらえると今日も一日元気、元気！」

ユオンは床にどっかりと座り込んで手近にあった廃棄物の雑誌を開く。ビンが立ち上がり、ユオンのカートからゴミ袋を取り出し、ゴミの溜め場に置いていく。ユ

オンとピンは友達より一歩進んだ仲良しらしく、シモジイにとってはそれは残念なことなのだが、ピンのことも気に入っているので「まあ、仕方ないか」と思っている。

週に六日、朝三時間働いて月七万、それに年金が六万。平均で月に五万くらいのライター収入。それがシモジイの収入のすべてだ。二十万には満たないが、気軽な独り身、贅沢しなければ毎晩軽く晩酌をしたり、時々映画観賞してみたりといった楽しみが可能だ。若い頃からやっていたコピーライター稼業を今でも細々と続けているのだ。

地下街のドトールコーヒー店でブラックコーヒーを飲みながら、シモジイは「政策学入門」の活字を追う。大学生の教科書として書かれた専門書を読むようになるとは彼は思いもしなかった。早朝パートを始めてから、図書館で借りてはこの手の本を読んでいる。

早朝パートを始めて、シモジイはこれまでの人生で縁のなかった人たちと知り合うようになった。肉体労働一筋のブルーカラー、生活保護受給者といった人々であ

る。それがきっかけで、典型的な独居老人の一人である自分の境遇も含め、いわゆる社会問題に少し関心が湧いてきたのだ。

彼が社会問題や社会運動に背を向けるようにして生きてきたのは、理由があった。

大学に入った頃に学園紛争が始まり、大学生下田和夫も周りのムードに影響され、さしたる思想的な裏付けもないまま学生運動に参加した。急速に過激化する運動の波に流されながら、気がつけば青いヘルメットを被って角材を手にデモ隊の先頭集団に居た。前方に機動隊のジュラルミンの盾が見えた時、デモを先導していたリーダー格の「闘士」らは素早く逃走。初めての武闘派デモで勝手の分からぬ下田学生は、角材を抱えてうろたえているうちに敢えなく機動隊の盾の内部に引きずり込まれ、殺気立った隊員たちの足蹴の餌食となった。

地方の高校、中学を卒業して就職する機動隊員たちは、高学歴で世間知らずのお坊っちゃまたちが主義主張を振りかざして天下国家に歯向かうのを苦々しく思っていたのだろう。

「この野郎！」「やってしまえ！」「このボケが！」

怒気を含んだ叫びとともに戦闘靴の蹴りが容赦なく下田学生の全身に浴びせられた。

蹴られるたびに鈍いような嫌な感じの衝撃を感じたが、それは不思議と「痛い」という感覚ではなく、もつと根本的に自分が破壊されつつあるという実感だった。

「死ぬんだな」と下田学生は思った。そのまま機動隊員たちの足蹴が続けば、本当に殺されていたかもしれない。少なくともかなりの重傷を負っていただろう。

「殺すな！」

下田を救ったのは、一人の機動隊員の声だった。

殺気立った隊員たちの輪が少し緩み、足蹴の嵐が鎮まった。

声の主かどうかは不明だが、隊員の一人がヘルメットを引き剥がされて地面にうずくまる下田を胸ぐらを掴んで立たせ、ギラギラする目で睨みながら言った。

「お前にもお父さん、お母さんがいるんだろう」

隊員が胸ぐらを揺すって突き放すように放すと、下田は後ろの鉄柱に頭を強くぶ

つげながら崩れ落ちた。

機動隊員たちが去ると、一部始終を見ていた野次馬たちの背後から知り合いの「同志」が現れた。横たわる下田を覗き込むように言う。

「大丈夫か」

「なんとか」

この時までには下田に意識はあった。同志は下田をゆつくりと立たせて肩で支え、駅へ向かって歩き出した。全身に浴びされた足蹴のダメージと、鉄柱にぶつけられた後頭部からの出血で下田はしばらく気を失った。

この体験で恐怖を植えつけられてしまった下田は、学生運動から腰が引け、デモに参加することはあっても二度とヘルメットは被らなかつた。政治的心情は希薄だとは言え、バリケードによる学園封鎖に加担してきた下田は、スト解除の後もまともに学生生活に戻ることはなかつた。

日々麻雀に溺れ、アルバイトで小金を稼いでは女の子の尻を追いかけるといふ軸の通らない学生生活を送った。

そんなヘナチヨコ左翼の成れの果てが、今のシモジイだ。

途中で眠気に襲われて「政策学入門」を手から滑り落とすこともままあるが、意外に飽きずに最後まで読了した。

今頃になって学生が読むような本に手が行くのは、学生時代を無為に過ごした悔いからでもある。

「ちゃんと勉強しておけば良かった」

政策学の本でシモジイが気に入った箇所は、ある大学生のエピソードだ。過疎で衰退著しい地域をいかにして再生させるかというゼミで、その学生は実際に自ら百姓になって農業を始めた。ゼロからのスタートだが、味が良くて健康的でもある有機野菜を栽培し、それをインターネットを使って販売した。また、地元に人が集まるような仕組みを考え出し、遂には一千万の年収を実現したという。

「俺も一発、小説でも書いて当ててやろうか」

そんな幻想、妄想をシモジイは楽しんでいるのだが、自分には小説で成功するよ

うな才能がないとも認めている。金も身寄りもない典型的な都会の独居老人のささやかな楽しみと彼は開き直っている。

「頭の中で思っただけのものにはタダやからな」

若い頃から、コピーライターとして人サマの商品を売るための文章は、無数と言っただけいい程書いてきた。しかし、日記を含め、自分自身のための文章はと言うと、ほとんど書いたことがない。

「死ぬまでに一度くらいは自分の作品と呼べるものを書いてみたい」

そんな思いを満たすために、ライターの仕事が減った六十歳を越えた頃、シモジイは小説を書き始めたのだ。

シモジイにとって難しいのは現実に向き合うことで、学生時代も今も変わりが無い。臆病者でちっぽけな自分を見る変わりに、様々な幻想に酔うのが習性になっているのだ。デモに参加し手酷い権力の暴力を受けたトラウマに向き合う変わりに、麻雀でツイた時の万能感に酔った。

貧困と孤独に潔く向き合う変わりに、今もまだ幻想に酔っているのだ。

六十の坂を越えたばかりの頃は、「自分は老人だ」という自覚はシモジイになかった。しかし、六十代も半ばを迎えた今は、さすがに変わってきた。当然の権利であるかのようになんの抵抗もなく優先座席に座るようにもなった。

今ではスカイビルでそこそこマイペースで働いているシモジイだが、最初からそうではなかった。最古参でパート全員の目付役である川北冬子に「仕事の覚えが遅い」と毎日怒られっぱなしで、内心反発をみなぎらせながらおどおどとした気持ちを抱えつつ働いていた。

シモジイの働く清掃パートは女性優位の世界で、シモジイを含む五人の男たちは肩身が狭い。作業の前後にパート連中が顔を揃える地下二階の詰所。部屋の真ん中で長椅子に並んで座って賑やかにおしゃべりをしているのは女たちであり、男どもは衝立で仕切られた男用ロッカーの前にしゃがみ込んでタバコを吸い、言葉少なにひそひそと話す。話題は鼻屑のチームが負けた野球であったり、惜しくも取り逃がした万馬券であったり、衝立のあちらには届かぬように一層声をひそめて吐き出

す川北への悪口であった。

男たちのうちの二人、伊万里と吉村は生活保護をもらいながら働いている。シモジイが最初に仲良くなったのは吉村だった。

髪の毛がふさふさしており、ナイーブな目付きの吉村は、一見知的な風貌で、五十八という年齢よりも若く見える。余程金のない時は別にして、最初の一年くらいシモジイは仕事の後、彼と一緒に喫茶店に寄って帰るのが常だった。

生活保護をもらっていると、パートで働いて稼いだ金が生活費を増やしてくれるわけではない。

「稼いだ分、受給額が減らされるのって辛いよね」

シモジイの言葉に頷きながら吉村は言う。

「ちよつとは増えるけどね。ほんの僅かや。けど、担当の職員は、仕事を見つけないように始終言ってくる」

自分が病気になるか怪我をすれば、貯金も家族もない自分は生活保護の道しかない。そう思ってシモジイは生活保護について調べたことがあった。

「保護費を貰うと貯金もできないらしいね」

「建前はそうやけど、少しくらい貯める方がいいと担当は言ってる」

広告代理店の社員として社会人を始め、その後フリーのライターをやってきたシモジイにとつて、ブルーカラーの生活実感は未知で関心があり、吉村にいろいろと尋ねた。多少的外れなことを言ったり訊いたりしても大目に見てもらえそうな安心感があり、コーヒーを飲みながらシモジイは吉村にいろいろ質問を投げかけた。ブルーカラーに対する自身の差別意識に気がついたのも、吉村との付き合いからだった。

一緒に朝のコーヒーを飲むようになった最初の頃、吉村がシモジイに言った。

「一度、家に遊びに行ってもいいですか」

シモジイは内心「困るな」と思った。

そこまで深い付き合いにしたくない。住まいであると同時に仕事場でもある自分のワンルームは、パートの世界とは切り離しておきたい。そんな気持ちたちが正直なところだった。

もちろん、その気持ちの奥には、今はたまたま清掃の仕事をしているが、本当の俺は吉村ら根っからのブルーカラーとは「人種が違うんや」という差別感情があるからだ。

「うん、そのうちに」

シモジイは言葉をぼかした。

そんなシモジイが自分から吉村に、

「今度の日曜日、うちに遊びにおいでよ」と誘ったのはちょっとした気持ちの変化があったからだ。

シモジイにはこの三十年来、困った時には相談に乗ってくれる裕子さんというメンターの存在がいる。早朝パートで清掃の仕事を始めたと電話で報告した時、裕子さんは即材に「あなた、よく叱られているでしょう」と言った。

「うん、そうですね。突然激しく叱られることがあります」

「そうですね。あなたの『俺は本当はコピーライターで、こんな仕事をする人間じゃない』という気持ちが態度に現れていて、ずっと現場で働いてきた人は滅茶

苦茶腹がたつのよ」

凶星過ぎ、シモジイは返す言葉もなかった。

「とにかくあなたは偉そうなのよ。明日職場行く時『私は一流大学出身のコピーライターです』と大きく書いた紙を背中に貼って行くことね」

苦笑いをしているシモジイに裕子さんは言葉を続けた。

「職場の人たちと仲良くなればいいのよ。私だったらその場のボスになってやるわ」
受話器の向こうから響く明るく高らかな笑い声を聞きながら、シモジイは雲が晴れたような気がした。

都心から二駅離れた街外れのワンルーム。シモジイが数年前から暮らす部屋は、築は古いが造りがしっかりしたマンションで、ユニットバスに小さなキッチン、居室として約八畳のスペースがある。三万円の家賃にしてはマアマアかなと、シモジイは気に入っている。専門学校の学生、独居老人、単身赴任らしき会社員、訳ありの男女の隠れ家などに利用されており、なかでも最近増えてきたのがベトナムから

の留学生たちだ。

朝のパートでベトナム人たちの素朴さ、人の良さに触れているシモジイは、マンシヨンの隣人たちに対しても何となく親しみを感じている。知人たちの中には、同じマンシヨンにベトナム人が多いという話をする。「嫌やねえ」としたり顔で言う輩がいるが、シモジイは内心で「こいつ分かってないな」とつぶやく。

朝の四時にセットされた目覚まし時計でシモジイの一日が始まる。トイレに行つたついでにユニットバスを掃除、パンと紅茶の朝飯、四時四十分には家を出る。体が資本だという意識があるのと、規則正しい生活、適度な運動になるパート仕事が続いているせいも、シモジイは人から歳よりも「若いね」と言われることが多い。もともと夜型のシモジイにとってこの生活は辛いのだが、二年近く続ける中で少しずつ慣れてきた。パートのない日曜日や祝日は七時頃まで寝るのが普通だが、そのことで感じる幸福感は非常に大きい。これも早朝パートの副産物だ。

「うっ」

涙が頬を伝う。シモジイが観ているのは、主人公の銀行員が孤軍奮闘で会社ぐるみの巨悪に戦うテレビドラマ。銀行員には陰で支える美人の妻がいて、彼女が男を励ますシーンである。やれやれ、めっきり涙もろくなってしまった、とシモジイは嘆息する。

オレにもかつて家族があった、と心の中でつぶやく。一人娘もいた。妻とは二十年以上前に離婚し、娘ともすっかり疎遠になってしまった。今年で二十八になる娘の里奈は元気にいるだろうかと思いい、シモジイは時々無性に娘に会いたくなる。折に触れて心の隅に置かれている家族や娘への思いが刺激されると、涙が出てくる。そんな自分の状態をシモジイは「自業自得やな」と自分を納得させながら、目を宙に彷徨わせる。

次の日曜日、吉村は数本の缶ビールとおつまみを手土産に、シモジイのワンルームを訪れた。

「わあ、広いですねえ！」

二十平方メートルに満たない部屋を広いとは思っていなかったシモジイには、吉村の反応は軽い驚きだった。大阪の中でも特にブルーカラーの多い地区で暮らす吉村の部屋は、同じくらしいの家賃でこれよりもずっと狭いらしい。その代わり保証人などいなくても、簡単に誰でも入居することができるのだ。

カレーが好きで吉村のためにシモジイは市販のルーでカレーを作り、副菜としてキャベツの酢漬けを用意していた。カレーを半分くらい食べた頃、吉村はシモジイのギターを手に取り、ピックでリズムを刻んだり、指で爪弾いたりして遊び始めた。

思い切って自宅に呼んで、吉村と少し距離が近づいた気がシモジイはした。同時に、吉村に対して、どこか「これ以上親しくはなれない」というバリアーのようなものも感じた。その理由がシモジイに理解できるのには、もう少し時間が必要だった。